

木村文助研究

通信 30号(最終)

二〇一四・一一・六

『赤い鳥』や資料をこれからも・

皆さんのご協力に感謝！

来月には資料館が北斗市総合分庁舎(旧大野町役場)二階へ移転になる。

一〇月九日、例会終了後、一〇人ほど資料館「赤い鳥・木村文助」コーナーへ出向き書棚、展示物など片付けた。段ボール20個になり一時間で終えた。

思えば一九九九年(平成一一年)、本格的な資料収集は町民の寄付金をもって『赤い鳥』復刻版全巻の購入であった。

一室が空き二年後コーナー設置が決まった。資料が続々集まり、展示会、講演会を数度開き、そして閲覧者が増えた。町教委は説明板「木村文助大野小学校長と『村の子供』」を建て、綴り方・自由画を教育広報に紹介した。市教委が継続している。

コーナー資料をフルに活用した二〇一一年(平成一三年)に行った合唱劇「村に咲く花」(合唱劇団体)は大成功だった。

会報「ぶんぼけん」とは別に当通信を年二回ペースで二〇〇年から発行した。今回の30号で区切りとした。

この間町・市民、多くの方、研究者、木村氏の親族の方々にお世話になった。

今後コーナーはどんな形で復活できるのか、努力していきたい。

皆さんのご協力に感謝である。

二〇一四年

五・一 通信29号発行

六・一五 「北の墓」・歴史と人物を訪ねて下(合田一道・一道塾)に「綴り方で子どもの心の成長を願う」木村文助」載る

七・三 北斗市教育広報

「きらめき」No.

33に綴り方

「豚」高1・岡

本子ヨノ

発行・大野文化財保護研究会

(略称:文保研・ぶんぼけん)

会長:木下寿実夫

〇四一一二〇一

北斗市本町3丁目11番32号

(0138) 77・8535

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。一日本一の綴方学校」と言われました。

豚

大野小高 岡本 子ヨノ

母が或日かんと袋を背負って来たので「やあ、何背負って来たの」と聞いたら、母は「ないているもの、分るべさ」といった。私は「豚ぎあ(かあ)、ぶうぶうとないているもんだ」と言ったら、妹は「豚ば(き)、かんと袋さ入れて来たんだよね」と言って顔をしかめて見ていた。私は「どこから買って来たの」ときくと、母は「和歌ちゃん家から買って来たさ」と言っていて裏の方に行った。

私も行つて見ると裏の隅の方の小さな小屋に父と二人で藁などを敷いてくれていた。その小屋は先の豚がはいった小屋で雨が降ると雨もりする寒さ(そ)うな小屋です。父は「食ひ(い)もの腹一ぱいに食せねがさ」と

言つて一生懸命に片づけている。母は「これから、うんと食せてちよつとの間に、おがらす」と言つてあった(いた)。私は「さ(そ)ういう所さ(に)入

ら母は「なに、この前の戸さてば(には)箱をおくし、藁てば(は)一っぱい敷いてけ(い)るし、なんにも寒くないさ」と言つた。

それから二三日後、大郷寺にお寺まいりに大沼の叔父さんが貞ちゃんと二人で遊びに来ました。その夕方、

母は豚に食物をくれるに行つて「豚死ぬいた(みたい)や」と言つて来た。行つて見ると豚は、びつたり藁の上に寝転んでおります。私は、もうこの豚は助からないと思つていたら、父は小屋の中にはいつて豚の背中を、たたいたり撫でたりしていたら、豚は口から何かたらしななきもせず、だまつて息を

はつはつとやつております。私は父や母に「その豚は助からないね、朝まできつと死ぬよ」と言つたら母は「うん、死ぬかもしらねや(しれない)、買つ

てから二三日よりたつものに(たつてないのに)、たんだ(ただ)七円なげたなあ」と惜しさ(そ)うに言つたすると大沼の叔父さんが、母に「神薬飲ませればよい。神薬持つて来い」と言つたので、母は走つて家に行つた。私も行つた。母は夢中になつて神薬の壺を見たら少し

綴方選評

鈴木 三重吉

岡本さんの「豚」は、構圖的によくまとまつた、素材のない作です。村落生活の或一断面として、ふかく興味を引かれます。人物的にはお母さんが一とう、いきいきと出ています。一たい、豚にのませた神薬といふ(う)のは、どういふ(う)薬なのでせう(しょう)。

持つて大村に行つたが大村の家では、もうしんばりをして寝ていた。母は「しんばり取れ、取れ」とち(ど)なつても誰も起きようとはしない。母は板戸をどんと踏むと戸がはづれた。母はいつて柵から神薬を茶わんに入れて持つて来て父にやつた。母は頭をおさへ(え)、大沼の叔父さんと父と二人で口に入れてやつた。豚は、ただぶうぶうと二度ないたきりだまつていた。みんな家に来た。「朝まで死なねばいいが」と母は言ふ(う)と、大沼の叔父さんは酒きげんで「いや死なない。決して死なない」と言つている。朝起きるや(なり)、すぐに行つて見ると、藁の中から、ぶうぶうと頭を出した。わたしは走つて来て母に教へ(え)ると、母も走つていった。今は大きくなつています。

■ことばの意味
【かんと袋】 麻でできた袋。
【食せねがさ】 食べさせなければ。
【おがらす】 大きくそだてる。
【しんばり】 戸などを固定する棒。